

アトピー性皮膚炎の予防と治療

杏林大学医学部小児科学教室教授

成田 雅美 (なりた まさみ)

アトピー性皮膚炎は子どもによくみられる皮膚疾患です。適切な対応をすれば症状をコントロールすることはそれほど難しくありませんが、治療の遅れや不適切な治療があると、かゆみなどの症状が続くだけでなく他のアレルギー疾患発症のリスク因子になることもわかってきました。特に乳児では発症早期からしっかり治療をすることが重要です。またここでは発症予防に関する新しい知見も紹介します。

アトピー性皮膚炎はアレルギー素因を持つ人に発症しやすく、痒みのある湿疹が良くなったり悪くなったりを慢性的に繰り返すのが特徴です。皮膚本来のバリア機能が何らかの要因で弱かったり、外界の刺激に過敏だったりすると、皮膚に慢性的な炎症がおこり、さらにかゆみやバリア機能障害が誘発されやすくなるという悪循環に陥ります。バリア機能が弱まった皮膚に外界からダニやほこり、食物抗原などが侵入すると免疫反応が活性化(感作)され、のちに食物アレルギーや気管支喘息、鼻炎などを発症しやすくなります。それではそもそもアトピー性皮膚炎の発症を予防する方法はあるのでしょうか？我が国の研究では、アトピー性皮膚炎の家族歴がある新生児に生後早期から保湿剤を全身に塗布したところ、生後32週までのアトピー性皮膚炎の発症が有意に減少したと報告されました。しかしその後の海外での介入試験では予防効果がないという結果も次々に発表されていて結論は出ていません。研究ごとにスキンケアの方法やアドヒアランス、生活習慣などが異なる点も影響しているかもしれません。

発症後の治療では皮膚バリア機能障害に対するスキンケア、皮膚の慢性炎症に対するステロイド外用薬を中心とした薬物療法、悪化因子の除去が三本柱です。最近小児適応のある外用薬や内服薬が新たに承認され選択肢も増えました。症状に応じた適切な治療により速やかに皮膚の炎症を抑え、ぶり返しがしないよう長期間良い状態を維持することが大切です。

略歴

1991年 東京大学医学部卒業、同附属病院小児科

その後 日本赤十字社医療センター(小児科)、亀田総合病院(小児科)

1998年 東京大学大学院医学系研究科修了(医学博士)、同医学部附属病院小児科(医員)

1999年 同小児科助手、米国カリフォルニア州サンディエゴに留学(博士研究員)

2002年 国立成育医療センターアレルギー科

(2011年より国立成育医療研究センターに改称)

2018年 国立成育医療研究センター アレルギーセンター総合アレルギー科医長

2019年 東京都立小児総合医療センターアレルギー科医長

2021年 杏林大学医学部小児科学教室教授(現在に至る)

所属学会

日本小児科学会、日本アレルギー学会、日本小児アレルギー学会、日本小児臨床アレルギー学会、日本子ども健康科学会、日本小児皮膚科学会、日本小児保健協会、日本小児救急医学会、食物アレルギー研究会、東京小児科医会